

『万葉集』卷十・一二三四歌について

——「こいまろぶ」と「展轉」・「反側」——

岩 田 久美加

一 はじめに

『万葉集』には、作者名を明らかにしない歌が多数ある。これは、作者未詳歌とよばれ、巻七・十・十一・十二を中心にまとまって収められている。作者未詳歌は、古くは比較的古い民謡的なものとされてきたが、昭和四十年代に始まった本格的な研究⁽¹⁾により、天平期の作品であり、それらの作者層は中下級官人であることが明らかにされている。しかし、その個々の表現の位相については、未だ手付かずの部分も多い。例えば、次の歌の表現についても説明すべきことは多数ある。

A 展轉こいまろぶ 戀者死友こひしうとも 灼然いちしろく 色庭不出いろにはいでじ 朝容貞之花あさがほのはな

(10—1374)

A 歌の初句「展轉」は、契沖以来「こいまろぶ」と義訓的に訓まれている。そして、この A 歌を除くと、「こいまろぶ」という訓は『万葉集』中に四例あり、全て「展轉」もしくは「反側」という表記である。A 歌を含めこれら五例の「展轉」や「反側」に

ついて、諸注⁽²⁾、一括して『詩経』周南「閟雎」の「展轉反側」を出典とすると指摘している。しかし、歌の形式は、A 歌は短歌であるのに対し、他の例は全て長歌である。更に A 歌のみが相聞で、挽歌や別離の歌である他の四例とは性質を異にする点も注目される。また、「展轉」と「反側」という異なる表記が、たとえ共に『詩経』の表現を出典とするにしても、一つの「こいまろぶ」という訓を導くことについて、詳しい検討がなされず、また、歌の内容が様々であるにもかかわらず、「展轉」「反側」という表現の意味するところは同じであるとしているのが現在の研究状況である。

本稿は、漢籍（特に漢詩）では「展轉」や「反側」がいかにして用いられたか、また、日本では「展轉」や「反側」といった表現がどのように受容され、その後どのように展開したのかを明らかにすることを通して、A 歌の特殊性を指摘した上で、新たな解釈を提示し、A 歌の和歌史的な位置付けを行ない、作者未詳歌の位相の一端を明らかにするものである。

二 漢籍における「展轉」・「反側」

はじめに、「展轉」や「反側」の意味を確認する。

『集韻』に「輾通作展」とあり、『玉篇』に「輾、轉也」「轉、廻也、旋也」とあり、「展轉」の原義は、「ぐるぐる回る」であった。また、『広雅』に「展轉、反側也」とあることから、「展轉」と「反側」は同一の意味で捉えられていた可能性が高い。⁽³⁾そこで、人が「展轉」や「反側」する場合、「転げまわる」という意味になり、夜、床に伏している時にそれらの行為を行えば、「寝返りを打つ」という意味になっていったと考えられる。

そこで、「展轉」や「反側」という行為を引き起こした契機は何であるかに焦点を当てながら用例を見ていく。

まず、既に「展轉」や「反側」の典故として指摘されている『詩経』⁽⁴⁾以下を検討する。

① 『詩経』国風 周南 「閟雎」

參差荇菜 左右流之 參差たる荇菜は、左右に流む。

窈窕淑女 寤寐求之 窈窕たる淑女は、寤寐に求む。

求之不得 寤寐思服 之を求めて得ざれば、寤寐に思服す。

悠哉悠哉 輾轉反側 悠なる哉、悠なる哉、輾轉反側す。

「窈窕淑女」を求めて、見つかなければ寝てもさめても思い続け、「輾轉反側」するのである。同じく『詩経』国風の「澤陂」にも次のようにある。

② 『詩経』国風 「澤陂」

彼澤之陂 有蒲萣萣 彼の澤陂に、蒲と萣萣有り。

有美一人 碩大且儼 美なる一人有り、碩大にして且つ儼たり。

寤寐無爲 輾轉伏枕 寤寐にも爲す無く、輾轉して枕に伏す。

ここにおいても、「美人」を寝てもさめても思い、「輾轉」して枕に顔を埋めている。

次に、『文選』には、「展轉」や「反側」の語は多くあるが、代表的な例を示す。

③ 王仲宣「登樓賦」

循階除而下降兮 氣交憤於胸臆 階除に循ひて下り降り、氣

夜參半而不寐兮 悵盤桓以反側 胸臆に交憤す。

夜參半までにして寐ねられず、悵として盤桓として

以て反側す。

④ 古辭「飲馬長城窟行」(樂府三首)

夢見在我傍 忽覺在他鄉 夢に見れば我が傍に在り、忽ち覺

むれば他郷に在り。

他郷各異縣 展轉不可見 他郷各々縣を異にし、展轉見る可

からず。

⑤ 潘安仁「悼亡詩三首」

歲寒無與同 朗月何朧朧 歲寒を與に同じうするもの無し、

朗月何ぞ朧朧たる。

展轉眊枕席 長簾竟牀空 展轉して枕席を眊るに、長簾は牀

の空しきに竟る。

牀空委清塵 室虛來悲風 牀は空しくして清塵に委し、室は

虚しくして悲風來たる。

⑥ 潘安仁「懷舊賦并序」

宵展轉而不寐 驟長歎以達晨 宵展轉として寐ねず、驟々長

歎して以て晨に達す。

獨鬱結其誰語 聊綴思於斯文 獨り鬱結して其れ誰にか語ら

ん、聊か思ひを斯の文に綴る。

③では、楼台上上つて四方を望み、故郷に思いを馳せながら、楼を降りてきたが、胸のうちの思いは静まらず、夜半まで眠ることも出来ず、「悵盤桓以反側」とある。これは、故郷に思いを馳せることによって眠れなくなり「反側」するのである。ここには掲

載していないが、魏文帝「雜詩二首」(第一首)も同じく「展轉不能寐 拔衣起彷徨」とあり、これは詩の内部では眠れない理由は語られてはいないが、起き出す事によって望郷の思いが湧き出てくるというものである。④では、妻の立場で夫を思い、「展轉」

するのだが、逢うことが出来ないということがよまれている。⑤

では、妻の死を悲しみ、「展轉眄枕席 長簾竟牀空 牀空委清塵

室虛來悲風」というように、一緒に夜を過ごす妻もなく、心落ち

着かないまま「展轉」すると、妻のいない寝台上に軽い塵がたまっ

ているということに気づくという。⑥の同じ潘安仁の作は、義父

の死を悼み、作った賦であるが、その旧居を訪れると、人影がな

く、朽ちてきている様子を目にし、悲しみが胸にあふれ、夜になっ

ても寝られず、「展轉」している(「宵展轉而不寐 驟長嘆以達晨」)。

このように見えてくると、「展轉」や「反側」は、「故郷」を思う、

若しくは「眼前にない人」を思うことが契機となっている。しか

し、契機がどちらであろうとも、共に悲しみの感情に基づいて行われたことにはかわりはない。

ここから、次のような指摘が出来る。まず、①～⑥は、全て「枕」や「牀」など寝具が描かれており、「夜」に「輾轉」「反側」し、寝られないことを叙している。従って、これらの「輾轉」や「反側」は「夜に寝返りを打つ」の意である。次に、その契機は、必ずしも、『詩経』のように、「美しい女性を思つて恋慕う」という感情によって触発されたものばかりではなく、むしろ人を悼む時に、思い出して「展轉」したり、故郷を思い出し、「反側」するといった方が多い。⁽⁸⁾

三 『万葉集』における「展轉」・「反側」

次に、『万葉集』の中の「展轉」と「反側」という表記について見ていく。

B 十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿祢家持作

歌六首

かけまくも あやに恐し 言はまくも ゆゆしきかも 我が

大君 皇子の尊 万代に 食したまはまし 大日本 久邇の

都は うちなびく 春さりぬれば 山辺には 花咲きををり

川瀬には 鮎子さ走り いや日異に 栄ゆる時に 逆言の

狂言とかも 白たへに 舍人装ひて 和東山 御興立たして

ひさかたの 天知らしぬれ ^{こいまひ}展轉 ひづち泣けども せむ

すべもなし

C 詠水江浦嶋子一首并短歌

(3—四七五)

春の日の 霞める時に 住吉の 岸に出で居て 釣舟の と
をらふ見れば 古の 事を思はゆる 水江の 浦島子が 鰐
釣り 鯛釣り誇り 七日まで 家にも来ずて 海界を 過ぎ
て漕ぎ行くに…(中略)…この箱を 開きて見てば もとの
ごと 家はあらむと 玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱よ
り出でて 常世辺に たなびきぬれば 立ち走り 叫び袖振
り **反側** 足ずりしつ つ たちまちに 心消失せぬ 若か
りし 肌もしわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは
息さへ絶えて 後つひに 命死にける 水江の 浦島子が
家所見ゆ (9—1740 虫麻呂集)

D

鹿嶋郡荊野橋別大伴卿歌一首并短歌
牡牛の 三宅の潟に さし向かふ 鹿島の 崎に さ丹塗りの
小舟を 設け 玉巻きの 小楫しじ貫き 夕潮の 満ちのとど
みに み舟子を 率ひ立てて 呼び立てて み舟出でなば
浜も狭に 後れ並み居て **反側** 恋ひかも居らむ 足ずり
し 音のみや泣かむ 海上の その津をさして 君が漕ぎ行
かば (9—1780 虫麻呂集)

E

磯城島の 大和の国に いかさまに 思ほしめせか つれも
なき 城上の宮に 大殿を仕へ奉りて 殿隠り 隠りいませ
ば 朝には 召して使ひ 夕には 召して使ひ 使はしし
舎人の子らは 行く鳥の 群がりて待ち あり待てど 召し
たまはねば 剣大刀 磨ぎし心を 天雲に 思ひはぶらし
展轉 ひづち泣けども 飽き足らぬかも

右一首

(13—13326)

B歌は、大伴家持による安積皇子への挽歌である。安積皇子が
天上界にあがっていかれたので、「展轉」し、涙にまみれて泣く
けれども、どうしようもない、と嘆く様を描いている。C歌は、
水江浦島子が、海神の神女から地上に戻る時に「決して開けるな」
と言われた箱を、開けてしまいい、開けると白い雲が出て、それを
追いかけて叫んで袖を振って、「反側」し、地団駄を踏んで、た
ちまちに正気をなくしてしまったことを表わしている。D歌は、
大伴卿と別れるときに詠んだものであり、見送りの風景として、
浜いっぱいに並び見送り、「反側」して、お慕いして嘆きましよ
う、と叙した部分である。E歌は、人麻呂の挽歌を模して後代に
作られたものと見られている。皇子を待ち続けているが、お召し
にならず、刀剣を磨くように研ぎ澄ました忠誠の心を、天雲の離
れていくように思い放たざるを得なくなり、「展轉」し、泣き濡
れるけれども、飽き足りないことを表現している。

また、B～E歌以外に、『万葉集』の中に、一例「反側」と表
記する例がある。

F 思ひにし余りにしかばすべをなみ我は言ひてき忘むべきもの
を (12—1947)

或本の歌に曰く「門に出でて 五**反側**乎 人見けむかも」。
一に云ふ「すべをなみ 出でてそ行きし 家のあたり見
に」。柿本朝臣人麻呂が歌集に云ふ「には鳥の なづさひ
来しを 人見けむかも」

これは、或本の歌の中に出てくる「反側」である。(訓については
後述する。)[表に出て「反側」するのを誰かに見られなかったで

あろうか」という意である。この場合、「寝返りをうつ」の意ではとりにくく、「転げまわる」「転げまわってもだえる」といった意であろう。

四 他の上代文献における「展轉」・「反側」

次に、他の上代文献における「展轉」「反側」の表現を検討する。

G 『懷風藻』五言「秋夜閨情」一首 従三位中納言兼中務卿

石上朝臣乙麻呂

他郷頻夜夢 談與麗人同 他郷頻に夜夢み、談らふこと麗人

と同じ。

寝裏歡如實 驚前恨泣空 寝裏歡ぶること實の如く、驚前恨

みて空に泣く。

空思向桂影 獨坐聽松風 空しく思ひて桂影に向かひ、獨り

坐て松風を聽く。

山川嶮易路 展轉憶閨中 山川嶮易の路、展轉閨の中を憶ふ。

「閨情」とは、女が離れている男(夫)を思ふ情を述べるといふものであるが、ここでは、作者が離れている女人を思っている。一人で、幾山川幾道路を隔てていて会うすべもない女人のことを思い、夜にねやの内で「展轉」としているというものである。

H 『古事記』上卷

是に、大穴牟邇神、其の菟に教へて告りたまひしく、「今急やかに此の水門に往き、水を以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黄を取りて、敷き散らして、其の上に展轉べば(『展轉其上者』)、汝が身、本の膚の如、必ず差えむ」とのり

たまひき。

これは、散文中の用例であるが、稲羽の白兔が和邇に毛皮を剥がされて、先に来た大国主の兄弟の神々に誤った処置を教えられ、悪化して泣いていたところ、大国主が通りかかり、事情を聞いて「今すぐに河口に行つて、真水を体を洗つて、その河口の蒲の花粉を取つて敷き散らして、その上を「展轉」すれば、体は元のようになるだろう」という場面である。

I 『日本書紀』雄略天皇即位前紀 冬十月

是に大泊瀬天皇、弓を彎ひ馬を驟せて、陽り呼ばひて、「猪有り」と曰ひて、即ち市辺押磐皇子を射殺したまふ。皇子の帳内佐伯部売輪、(更に名は仲子)屍を抱きて駭け惋きて、所由を解らず。反側び呼び號びて(『反側呼号』)、頭脚に往還ふ、天皇、尚誅したまひつ。

大泊瀬天皇(雄略)は、市辺押磐皇子を恨んでおり、偽りの狩に市辺押磐皇子を誘つて、狩の最中に「猪がいる」と大声で言い、市辺押磐皇子を射殺したところ、皇子の帳内佐伯部売輪が、遺骸を抱き、歎いて途方にくれ、「反側」して、名を呼び遺骸の頭と脚を行つたりきたりしたという様子を描いている。

第三、四章で見てきたB・E歌及び、F・Iの上代の文献の中に出てくる「展轉」や「反側」は、Gの用例以外は、「夜に寝返りをうつ」と読み取ることが不自然であり、単に「転げまわる」といったことを意味しているとした方が穏やかである。これは、第二章の漢籍における「展轉」や「反側」が「夜に寝返りをうつ」意であるのと異なっている。

五 倭語「こいまろぶ」について

ここで、「こいまろぶ」「ふしまろぶ」について確認する。

「まろぶ」は、『類聚名義抄』の「轉」（佛・中）に「マロブ」と訓があり、仮名書き例は「催馬楽」の「総角」にある。

総角や とうとう 尋ばかりや とうとう 離りて寝たれども 万呂比安比介利 とうとう か寄りあひけり とうとう

（催馬楽）「総角」

離れて寝ていた総角に髪を結った子供の、「万呂比安比介利」という様子を表現している。つまり、二人の子供がそれぞれ床の上でゴロゴロ転がったら（離れていた二人が）、出会ったよ、という意味である。

ところで、吉田比呂子に「コイマロブ・アシスル・フム・タチハシル・ラドル・モトホル・アフグ・ハラバフ・オラブ・サケブなどの言葉は、蘇生を目的とする匍匐礼で行われる行為を表わす言葉」という指摘がある。この指摘から、もともと日本には、葬送の儀礼で行われる悲しみを表現するための転げまわる行為をさす「こいまろぶ」という表現があったと言えよう。それに「展轉」や「反側」といった漢籍の表記を援用した「こいまろぶ」と、漢籍の「展轉」や「反側」といった表現内容に倭語「こいまろぶ」を当てた「こいまろぶ」があったと考えられる。そのため、先に第四章で指摘したように、漢籍における「展轉」や「反側」の意味と日本における「展轉」や「反側」の意味が異なっているのである。前者がB・E歌及びF、H、Iの例であり、後者がGであ

る。そして、前者が、『詩経』の例よりも寧ろ『文選』に多く見られる悼亡詩の系統の例を受容したのは、元來、倭語「マロブ」が匍匐礼にかかわる語であることと密接に関係しているためであろう。

一方、「こいまろぶ」の「こい」は、『時代別国語大辞典上代篇』三省堂によると、「こゆ」の連用形であると言われている。「こゆ」は「臥す」意であるが、「こい」は、上代においては、次に示すように、複合語の一部分でのみ見られる形である。

……うつせみの 世の人なれば うちなびき 床に許伊布之
痛けくし： （17―三九六）

従って、「こいまろぶ」とは、「臥して転がる」つまり「ゴロゴロ転がる」「転げまわる」という動作を示すものであり、「こいまろぶ」と「ふしまろぶ」はほぼ同義として扱っても良いであろう。

ここで、Fの用例について見てみたい。諸本この「反側」については訓の異同がある。元暦校本と広瀬本は訓をつけず、西本願寺本・温故堂本・大矢本・京都大学本は朱書きであり、西本願寺本・大矢本・京都大学本・活字附訓本・寛永版本は「コヒフス」であり、細井本「コシマロフ」左に「コヒフス」、紀州本「コイフス」、温故堂本「コヒフソ」、京都大学本の左緒「フシマロヒ」、神宮文庫本「コシマロフ」左「コヒフス」とある（『校本萬葉集』による）。ここから、「コイフス」系と「フシマロヒ」系があることが大まかに見て取れるが、もし、「コイフス」となると、「横たわる」という意になって、「寝返りをうつ」「転げまわる」といった意味はなくなる。他の『万葉集』の「展轉」や「反側」の訓に

ついで異同を見ると、ほぼ全て「コイマロビ」「フシマロビ」と諸本訓んでいる。⁽¹⁰⁾ここから考えると、Fの「反側」は、もともと「フシマロビ」もしくは「コイマロビ」という訓であったのかもしれないが、音数の関係などから、「コイフス」系の訓がつけられてきたのではないだろうか。

六 漢籍の「展轉」・「反側」のその後の日本での受容

第二章で見てきたように、漢籍において、「展轉」や「反側」は、人が夜に「目の前にいない人・物」を思い、「眠れずに、寝返りをうつ（眠れずに、転げまわる）」時の表現となっている。それに対して、日本の上代においては、「転げまわる」という意味で、受容されていることは確認できるが、Gの『懷風藻』の例を除いては、「夜眠れずに寝返りをうつ」といった意味では用いられていない。それはどのような理由であろいか。それを探る一つの手がかりとして、その後の「展轉」や「反側」の変遷を見てみたい。勅撰三集にも用例はなく、次に掲げる『菅家後集』が早い例である。

J 『菅家後集』 503 「秋夜」

床頭展轉夜深更 床の頭にて展轉して 夜 深更なり
背壁微燈夢不成 壁に背むけたる微なる燈に夢も成らず
早雁寒蛩聞一種 早き雁も寒いたる蛩も 聞くに一種
唯無童子讀書聲 ただ童子の書を讀む聲のみ無し

これは、「夜深更」という表現より、「寝返りをうつ」という意でとれる。漢詩の左に「童子小男幼字、近曾夭亡」とあり、内容

的には、亡くなった子供のことを思い出し、悼んでいるものである。これは、第二章の漢籍における「展轉」や「反側」の用いられ方に近い。

K 一方、「こいまろぶ」及び「ふしまろぶ」はどうであろいか。
服ぬぎてかへり

ふしまろぶ ほどふ形見を見じとてや別れし衣捨てて来ぬらん
（『伊勢集』二二〇）⁽¹¹⁾

これは、三句以下「見よとてやわかれしきぬはすてておきけん」として『古今六帖』二四八一にとられている。「ふしまろぶ」悲しんだ形見を見まいとその服を脱ぎ捨てたのかもしれない、という意味の喪が明けて喪服を脱いだことをよんだ歌である。「ふしまろび」は、「転げまわる」という意である。

また、『宇津保物語』にも次のようにある。

L 臥しまろびからくれなゐに泣き流す涙の川にたぎる胸の火
（あて宮）

これは、あて宮が入内する場面で、重態で生死の境をさまよっている仲澄に書き付けて贈ろうとした歌である。「ふしまろび」唐紅に流す涙の川にたぎる胸の火のような思いです、というような意味であろ。これも、「転げまわる」という意である。

「こいまろぶ」という表現は、平安朝以降消滅してしまいが、「ふしまろぶ」という表現自体は、散文の中に、その後も見られる。しかし、和歌の表現としては、平安朝にK、L歌をみる以外は、江戸時代に賀茂真淵らによって見直されるまで殆ど用いられない。

平安朝以後の「輾轉」や「反側」及び「こいまろぶ」「ふしまろぶ」について見てみると、次のことが指摘できる。日本においては、漢詩において『懷風藻』以後、暫く「展轉」や「反側」という表現を見ることが出来ない。また、和歌においても、『万葉集』以後、「こいまろぶ」や「ふしまろぶ」という表現は殆ど目にすることは無い。そして、「こいまろぶ」や「ふしまろぶ」が用いられたとしても、死に関わる作品において「転げまわる」という意味でしか用いられていない。これは、和歌が、歌謡とは異なり、歌に動作を読み込む意識が少ないために、後々「こいまろぶ」「ふしまろぶ」という表現が用いられなくなったのではないだろうか。これは、和歌史における長歌の衰退が、演劇的な所作を読み込むことへの意識の衰退によるものであることと重なり合っている。

七 A歌の位相

以上を踏まえてA歌の特殊性、及び解釈についてまとめておく。

A歌は、結句で集中五首しか見えない「朝顔の花」⁽¹³⁾という花で殊更に「朝」を意識させている。B・E歌の『万葉集』の用例には、時間を意識させるような表現はないが、この「朝顔の花」というのは、色鮮やかであるだけでなく、「朝」に咲くものだという意識があったからこそ、次に掲げるように「朝顔は朝露を負うものだと言えども」という発想が生まれたのだろう。

朝顔は朝露負いて咲くといへど夕影にこそ咲きまされけれ

更に、第三句では「灼然」⁽¹⁵⁾という漢語を用いていることを考え合わせると、この「展轉」は倭語「こいまろぶ」に「展轉」という漢語を当てたのではなく、漢籍の「夜眠れずに寝返りばかりうっている」という意味に対して、「コイマロビ」と義訓的によんだ表現である。そのように考えると、「夜は人を思うあまり眠れず寝返りばかりうっている」、恋い死にしようとも、はつきりとはあらずまい、あの色鮮やかな「朝に咲く朝顔の花」のようには、という解釈の方が良いのではないだろうか。従って、「臥こいまろび」という、恋い死にが受ける語としては、やや不似合いな表現⁽¹⁶⁾と言われるような表現も、結句の「朝」との対比から「こいまろび」で「夜」を暗示しているのである。勿論、第一句、第二句のこの頭韻、第三句、第四句のこの頭韻も意識して用いられたものであろう。

A歌「展轉」の、漢籍の表現内容を漢籍の表記で記し、そこに倭語の訓をあてるといって、漢籍の受容の方法は、「惻隠」と表記し、「ねもころ」と訓するのに近い。

玉梓の道行かずしあらば惻隠⁽¹⁷⁾かかる恋にはあはざらましを

(11—13九三)

二三九三歌の「惻隠」について、小島憲之⁽¹⁸⁾は、「惻隠」は、元来「いたはしく思ふ・心を痛める・しのびがたく思ふ」の意であり、倭語「ねもころ」にはすぐには結びつかないにもかかわらず、二三九三歌で用いられているのは、「心をつくした」といった倭語「ねもころ」の意に加えて、「あわれである」や「痛ましい」という

印象をも表現するためであると指摘している。これは、A歌の「展轉」が、「こいまろぶ」という倭語の「転げまわる」を意味しているだけでなく、「夜に人を思うあまり眠れずに寝返りをうつ」といった意味をも持たせるのと同じである。言うまでもなく、二三九四歌は人麻呂歌集出の歌であり、A歌とは、制作年代が異なるが、漢籍に見られる表記を用いて記すことにより、歌の意味が重層性を持ち、より明らかにするという共通性はある。

第一章であれたように、作者未詳歌の作者は、中下級官人と言われ、彼らが漢詩文に対する知識を有していることは、すでに指摘されている¹⁹。そのような環境にあつても、A歌は、「惻隠」と同じく、『万葉集』の義訓の中においても「展轉」の訓のあて方が稀である。これは、表記も含めて「読む」ことによって初めて意味が明らかにになり、「歌を書く」ことを前提にした歌で、やはり、かなりの教養を有した者の手によってなされた技巧的なものである。それは、次に掲げるA歌の類歌を見ることによって明らかである。

隠りには恋ひて死ぬともみ園生の韓藍の花の色に出でめやも

(11—七八四)

これは、A歌と同じく第二句で「恋い死」をよみ、自分の思いを外にあらわさないと表明する歌である。しかし、二七八四歌は、A歌に見られたような漢籍に典拠を求める表現の使用、頭韻、倒置法などもない。この二首を比較すると、A歌の技巧性は一目瞭然である。

このようにA歌は、和歌が、音声的な側面を有しながらも「書

く歌」へと変貌したことを如実に示す歌であり、平仮名により表記されるその後の和歌には見ることの出来ない特殊な歌であることが言えよう。

*『万葉集』は『萬葉集』（塙書房）により、『日本書紀』、『古事記』、『懷風藻』、『菅家後集』はそれぞれ日本古典文学大系（岩波書店）のそれにより、『催馬楽』、『宇津保物語』はそれぞれ新編日本古典文学全集（小学館）の『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄』、『うつほ物語②』により、『伊勢集』は新日本古典文学大系（岩波書店）の『平安私家集』により、『古今六帖』は『新編国歌大観』（角川書店）の本文により、『詩経』、『文選』はそれぞれ新釈漢文大系（明治書院）のそれによった。ただし一部傍線等を付したり私に改めた箇所がある。

注(1) 高野正美『万葉集作者未詳歌の研究』（笠間書院）昭和五十七年六月刊。中川幸廣『万葉集の作品と基層』（桜楓社）一九九三年二月刊。

(2) 『萬葉代匠記』初稿本の四七五歌の注は、初めて「展轉反側」の出典を『詩経』に求めたものである。また、『万葉集』の京都大学本の四七五歌の頭書に、歌の下に「開離」に「展轉」という表現があるという内容の注がある。なお、『詩経』以外の出典を注するものは、近年では、四七五歌の注で、後にふれる潘安仁「哀詩」を出典とする新日本古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）と、四七五歌の注で、潘安仁「懷旧賦」及び『詩経』を、一七四〇歌の注で「登樓賦」及び『詩経』をそれぞれ出典とする和歌文学大系『萬葉集』（明治書院）だけである。

(3) 「展轉」と「反側」が同義であったとしても、書き分けがなされた理由は不明であるが、用例を検討すると、韻の関係で「展轉」「反側」どちらを用いるか書き分けていた可能性はある。なお、後代の注であるが『詩集伝』に「展者轉之半轉者展之周反未得而展之過側

者轉之皆臥不安席之意」とあり、共に「転がる」という意は内包されていたようである。

- (4) なお、『詩経』にはここに掲げた以外に「小雅」の「節南山之什」にも「反側」という表現がある。しかし、当時日本において目にしうる注釈書のうち、『毛傳』には「反側不正直也」とあり、『鄭箋』には「好猶善也反側輾轉也」とあり、まっすぐでないという意と、所謂「輾轉反側」という意の二種類に解釈が分かれていた。従って、今回は、検討の対象から外す。

- (5) なお、『詩経』の次に成立が古いといわれている『楚辭』には「反側」の用例はあるが、所謂「輾轉反側」のような用例は無い。ただし、王逸が自作を加えた『楚辭章句』の第十六卷「九歎」の「遠逝」には「憂心展轉愁悵兮」とある。

- (6) 『玉臺新詠』では蔡邕となっているが疑わしい、との指摘が新釋漢文大系『文選』の当該条にはある。

- (7) 和歌文学大系『萬葉集』（明治書院）の四七五番歌の「展轉」の注では、この「懷舊賦」が『詩経』周南「開雎」とともに記載され、「多く見える表現」と指摘されている。

- (8) なお、その後の中国における「展轉」や「反側」の表現をたどると、夜眠れずに「寝返りをうつ」といった表現が引き継がれていて、「閨情」によるものだけではなく、友との別れの辛さや、我が身を歎くなどより一層バリエーションが出てくる。これは、倭語「こいまろぶ」がとる変遷とは大きく異なる。

- (9) 吉田比呂子「儀礼を背景に持つ表現—マロブとアシズリを中心として—」『国語語彙史の研究 八』（和泉書院）昭和六十二年十一月刊。

- (10) この「展轉」「反側」の訓に関しては、本文との関係に一部問題がある。A歌に関して「展轉」としてはいない諸本があり、それらは次のような本文と訓をとっている。元暦校本、類聚古集は「展傳」とし、紀州本は、「辰傳」としている。訓は、元暦校本は「ツテく」とし、漢字の右に墨「コトニイテ、イ」とあり、類聚古集は「人

つてに」とし、紀州本は「フシマロビ」としている。このように、全てが「コイマロビ」「フシマロビ」といった訓を取るわけではないが、「仙覚抄」で、「轉ヲ傳ニ作リツテくニト訓スルヲ否トシ展轉トス」と指摘している。他のB-E歌については、B歌の細井本が「ツテくニ」とある以外は、異なる本文と訓はない。

- (11) 伊勢の自作歌と考えられている部分にある。

- (12) 『行尊大僧正集』には次のような歌がある。

かへし
ふしまろびはるてふなさへをしきかなまたもみるべきはなのかげかは (一八五)

このように、平安朝末期から中世にかけても極々僅かに用例を見ることは出来るが、好んで用いられた「うたことば」でなかったことは明らかであろう。なお、江戸期には『賀茂翁家集』に続き『八十浦之玉』などに「こいまろぶ」「ふしまろぶ」という語を用いた歌がおさめられている。『万葉集』への興味をもつ人々には「こいまろぶ」「ふしまろぶ」ということばが「万葉語」として認識されることによって用いられたのだと考えられよう。

- (13) 8—1一五三八、10—二一〇四、二二七四、二二七五、14—三三三〇の本文中。

- (14) 「朝顔」が現在の何に当たるかは諸説ある。『新撰字鏡』を根拠とする桔梗説、『類聚名義抄』を根拠とする權説、二二〇四歌を根拠とする昼顔説などがあり、はっきりとは定まっていない。以上平田善信・身崎壽「和歌植物表現辞典」（東京堂出版）参照。

- (15) 新日本古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）は六八八番歌の注で、「灼然」を漢語とし、「中論」に典拠を求めている。

- (16) 阿蘇瑞枝『萬葉集全注十』（有斐閣）二二七四歌【考】。

- (17) 同右。

- (18) 小島憲之『上代日本文学与中国文学 中』（塙書房）昭和三十三年三月刊。また、稲岡耕二『萬葉集全注十二』（有斐閣）二二三九三歌【語釈】も同様な指摘をする。

(19) 注(1)

(20) 通常「恋は死ぬとも」「恋て死ぬとも」をよみ込む場合、それらの句は次に掲げるように、第四句が「…じ」と打消意思で結ばれ結句に置かれた「恋死ぬとも」の句は倒置となる。しかし、A歌は「恋死ぬとも」の句を第二句に置くという類型から外れた用い方をしながらも、第四句を「…じ」という打消意思で結び、結句を「朝顔が花」と体言止めを用いて倒置をしている。「恋死ぬとも」の類型という観点から見ても、A歌の技巧性は明らかであろう。

これも恋と言へば薄きことなり然れども我は忘れじ恋ひは死ぬとも
(12—二九三八)

とも

(12—三〇三八)

荒磯越しほか行く波のほか心我は思はじ恋ひて死ぬとも

(11—二四三八)

高山の岩本激ち行く水の音には立てじ恋ひて死ぬとも

(11—二七一八)

*本稿は、〈国際シンポジウム〉「世界における日中文化と文学」(世界中的中日文化与文学)(二〇〇六年九月一日 於 東北師範大学外国語学院)における「古代のうたと漢詩文―「こいまろぶ」と「轆轤・「反側」について―」と題する発表をもとにしたものである。席上等、様々にご教示くださった方々に厚く御礼申し上げます。

新刊紹介

大屋幸世著

『日本近代文学書誌書目抄』

著者の古書への愛好を全頁から感じさせる本書によって、近代文学全体からすれば一部にすぎないが、新聞芸欄や文芸雑誌および文庫等の目次細目が資料化された。

明治期末の『東京毎日新聞』『やまと新聞』

文芸欄から始まり、大正期の『読書人』と昭和期の『三十日』(野田書房)を経て、戦後の文芸雑誌および河出書房市民文庫に至り、昭和二〇年代の詩のアンソロジー『現代詩集』『現代詩人集』を添える。それぞれの冒頭には改題もあって親切。とくに戦後文芸雑誌には多くの紙幅が費やされており、戦後文学研究には貴重な文献となる。

執筆者の顔触れ、繰りかえされる語彙、

テーマの共通性等から、いくらかでも課題は抽出されるだろう。「手元に全部揃え」てその雑誌の「実質」を知悉したうえで作製された細目からは、眺めているだけでも単に雑誌の性格や変遷ばかりでなく、その時期における言説空間の諸相を窺うことができる。

(二〇〇六年三月 日本古書通信社 A5
判 二八三頁 税込二九四〇円)

〔古矢篤史〕